

「フラナリー・オコナーの短編小説における暴力と恩寵について」

アメリカ南部の現代作家の一人、フラナリー・オコナーの短編小説32編の中から5編を取り上げ、それぞれの物語の主題とみられる暴力と恩寵との関係について、作者の意図するところを考察してみる。

フラナリー・オコナーは、1925年、アメリカ合衆国南部ジョージア州サバンナに、実業家であり、後に不動産業を営む裕福なカトリック教徒の家庭に、一人っ子として生をうける。16歳の時、父親を不治の病、紅斑性狼瘡で失う。後にジョージア州ミレッジビルの郊外にある農場で、母親と暮らす。1949年、父親と同じ病を発症する。しかし、病に屈することなく、39歳で没するまで、講演活動、作家活動に励む。

彼女の作品には、アメリカ南部の歴史と文化、また熱心なカトリック教徒としての影響が、作品に色濃く反映されている。

南部の人々は、南北戦争（1861－1865）に負けはしたが、南部人としての誇りと、北部人に対する優越感を保ちつづけていた。

プロテスタントの色濃い南部において、オコナーは敬虔なカトリック教徒であり、アダムとイヴの原罪を強く信じ、人々の原罪を背負って十字架にかけられ、復活するイエス・キリストに象徴されるように、ある種の精神的、肉体的暴力を受ける事によって、一瞬の神の恩寵が与えられ、人間は生まれ変わる、と強く信じていた。それ故にオコナーは、小説と言う手段を使って、物語の主人公たちに精神的または肉体的暴力を与え、神の恩寵を経験させるのである。

『善人はなかなかいない』は、彼女の32編の短編の中で、最も暴力的な物語である。

南部的淑女を気取る祖母と、息子夫婦、彼らの赤ん坊を含む子供3人、合計6人の一家が、彼らの住むアトランタからフロリダに遊びに行く途中で、父親の運転する車が溝に落ちたことから、悲劇が始まる。車から這い出た一家に脱獄囚達が襲いかかる。主犯格のミスフィットを含む3人は、この一家を次々と森に連れて行き、銃で殺害する。最後に残った祖母とミスフィットの対話が圧巻である。日頃あまり信仰心を示さない祖母であるが、しきりにイエスの名を唱え、命乞いをし、ミスフィットにもイエスに祈るように勧める。しかしミスフィットは、「自分は誰の助けもいらない、一人でやっていける」と言い、さらに「イエスが、すべての物のバランスを崩した」と主張し、祖母をも、銃で殺

害する。この結末に対して、色々な解釈が見られるが、祖母は、最後の一瞬に、神の恩寵を感じ、救われたのである。オコナーは、祖母が殺害された直後の様子を、「その顔は雲一つない空を見上げて微笑んでいる。」と書いている。

『グリーンリーフ』も、『善人はなかなかいない』の次に残酷な物語である。主人公ミセス・メイは、実業家だった夫を亡くした後、夫の残してくれた農場でグリーンリーフ一家を、雇いながら2人の息子を育て上げる。ある日、使用人ミスター・グリーンリーフの牡牛が、ミセス・メイの屋敷に入り込み、生垣を食いちぎり始める。ミセス・メイは、ミスター・グリーンリーフに、その牡牛を森の牧草地に追い込み、射殺するように頼む。ミセス・メイは、それを見届けようと車で、その牧草地に行き、バンパーに腰を掛ける。暫くすると、その牡牛が現れ、ミセス・メイを目がけて突進してくる。片方の角は彼女の心臓を貫き、もう一方の角は、彼女の脇腹を刺し通し、離れることはなかった。ミセス・メイは、一瞬のうちに眩しい光を感じる。つまり、肉体的暴力を受けたのち、神の恩寵が与えられたのである。

『長引く悪寒』では、主人公アズベリー（25歳）は、自宅の奴隷的雰囲気から逃れ、作家として成功したいと思い、ニューヨークに行くが、その夢は容易に実現せず、悪寒に襲われ、無一文となる。仕方なく故郷である南部に帰り、母親に手紙を残して、死ぬ事を決意するが、母親に無理やりに、田舎の医師に血液検査を受けさせられ、その結果、悪寒は完治する事はないが、それで死ぬこともないブルセラ菌感染症とわかる。アズベリーは、身震いして窓の外を見る。金色の眩しい太陽が、紫色の雲から姿を見せる。彼は、永続する恐怖と闘いながらも、生きる事を決意する。部屋の天井からは、子供の頃から見慣れていた猛鳥の形をしたしみが、突然動き始め、聖霊となり、アズベリーに向って降臨しつづける。彼は、初めて神の恩寵を感じるのである。

『すべて上昇するものは一点に集まる』では、主人公ジュリアンは、大学卒業後、タイプライターの販売をしながら一年たつが、本来は作家志望の青年である。母親は、曾祖父が大農園主だった時代のことが忘れられない。黒人に対しても、かなりの偏見をもっている。ジュリアンは、母親のそのような考えに、強く反発を感じているが、人種によって、バスの座席を分ける規則が廃止されて以来、ジュリアンは、母親が減量のためY.M.C.A.のクラスに通うのに、付き添って行く。

ある日、男の子をつれた大柄な黒人女性が乗ってくる。この二組の親子は、たまたま同じバス停で降りるのであるが、ジュリアンの母親は、その黒人女性の子供が可愛いと思い、一セント硬貨を渡そうとする。すると、その子の母親は、怒りを爆発させ、自分のハンドバッグを振り上げ、ジュリアンの母親を殴る。ジュリアンは母親にとって良い教訓になると思ったが、母親が少し歩いて、

歩道に倒れるのを見たとき、彼に罪と悲しみの世界が押し寄せてくる。彼は、深い後悔に打ちのめされるが、このジュリアンの後悔こそが、神の恩寵を受ける第一歩なのである。

『啓示』の物語では、ミセス・ターピンが、肉体的、精神的暴力を受けた後、その理由を深く考えることによって、神の啓示、つまり恩寵を受けるのである。

ミセス・ターピンは、足を怪我した夫を連れて、白人だけが行く病院の待合室で、他の患者達と話し合っている。彼女が「自分は、少しずつ何もかも持っていて、気立ての良い人間に生まれついたことを、イエスに感謝する。」と、口に出した途端に、近くで本を読んでいた醜い女子大生が、その本をミセス・ターピンに投げつけて叫ぶ。「もといいた地獄にもどるがいい、老いぼれのいぼ豚め。」ミセス・ターピンは、非常にショックを受け、家に帰って横になり、その理由を懸命に考える。夕方、自分の農場の豚飼育場に行き、なおもその理由を考えつづける。ふと見上げた夕空の光の中に、さまざまな人々の行列が、紫色の光の中を、空に向かって進んで行くのが見える。黒人が先頭で、夫のクロードと自分は、その行列の最後にいる。森の中から聞こえてくるこおろぎの鳴き声が、神を讃えるハレルヤの合唱として、ミセス・ターピンの耳に、ひびくのである。この時、彼女は神の恩寵を感じ、自分の愚かさを悟る。

オコナーから見れば、神の恩寵は、人間の考える理性や合理性を超越しているのである。オコナーは、暴力的な表現を使うという残忍な手法によって、主人公たちに、精神的、肉体的苦痛を与え、また鈍感な読者に、強く訴えかけることによって、神の恩寵を、理解させようとしている。オコナーのすべての作品は、神の恩寵に、あまり、又は、全く気付いていない登場人物に対して、与えられているように思われる。